

烏森トレッキング回想記

第十三回

日 程：'04. 11. 28 (土) ~ 11. 29 (日)

行 程：1日目 五井駅（小湊鉄道）～上総中野～水月寺～幻の五滝～養老溪谷・栗
又の滝～滝見苑（昼食）～養老溪谷駅～五井～岩井

泊／民宿「魚赤」

2日目 岩井～浜金谷～鋸山／観月台・日本寺～保田～山田屋（昼食）～保田
駅

メンバー：米本、山田、小林、磯崎

今回は、小林氏の企画により、南房総・安房の旅。

訪ねる先は、紅葉の名勝地／養老溪谷、梅ヶ瀬溪谷と、東京湾が一望でき、“地獄のぞき”
で知られる、「鋸山（のこぎりやま） 329m」。

今回は、初回から連続参加していた吉川氏が、退院の翌日と云うこともあり、残念ながら
出席かなわず、加えて、会頭は大事を取り、大谷氏は別の所用から、また森氏は友人と
のサッカー観戦先約があり、それぞれに欠席、第三回以来の最少人数4名の旅となる。

待ち合わせは小湊鉄道の起点駅でもある、JR 内房線の「五井駅」。

神奈川組み（米本、山田、磯崎）は横浜駅から東京湾アクアライン経由のバスで、地元
小林氏は電車の乗り継ぎで、それぞれ現地に向かい、予定時刻に無事合流。

（神奈川組は、一便早いバスで到着し、インターネット検索した五井市内の巨樹巡りをし
たようだが、何故か多くを語らず）

小湊鉄道は、房総半島を東南の方向に走り、終点の「上総中野駅」からは、「いすみ鉄道」
と繋ぎ、最終、外房線の「大原駅」と結ぶ横断線。

JR ホームに並設されたプラットホームはザックを背負うハイキング客で溢れ、“まさに、
現在が紅葉の盛り”と確信する。

【余談37】紅葉が、陽光と寒暖の差から生じるのは周知の通りで、南国沖縄県は、後者
の条件に恵まれず、紅葉を楽しむことが難しいと云われる。

時期は緯度と高度が関係するが、日本の紅葉前線は北海道／大雪山からスタートし、最
終、花の郷、千葉／南房総で終焉する。

旅慣れたメンバーは、颯爽たるもので、てきぱき行動。

米本氏は、心得たりと、ホーム上の臨時切符売り場で4人分の「1日フリー乗車券」をまとめ買いし、後のメンバーは、座席確保に先行した小林氏を追い、全車輦を隈無く点検。

成果は上々、横一列の並び席ながら、4人分を確保し、荷物を寝かして占有宣言。

とは云うものの、古狸にも似る我メンバー、かつての様に寝た振りをする必要はなく、中には、早、優先される好々爺も居り。

定刻に出発した満員電車は、しばらく、平凡な田園風景の中を走り、車窓から、「光風台」の駅名を見、かつて同所から丸の内に勤務していた人を思い出す。

やがて電車は山間に入り、徐々に里山風景を増し、停車する小さな駅舎の背に、実で枝撓む「柿の木」を見る頃には、歓声が上がったり、指さし合ったりと車内の空気が揺れ動く。

リーダーの指示で予定を変更。

「養老溪谷駅」での降車を見送り、次駅の終点、「上総中野駅」迄乗車し、**行先知らずの気楽な鳥、どこに向かうやら、どこで降りるやら、一切をリーダー任せで、駅前からは、更に、出発前のバスに乗り継ぐ。**

満員の車内では、今日の予定を語る団体客の会話がかまびすしい。

バス停、「水月寺」で下車。

広い通りを右手の脇道に入ると、禅宗の名刹と紹介される、「水月寺」。

規模小体ながら、構えは充分、小さな門をくぐると、薨が急勾配に波打つ本堂が境内正面に建ち、右手、堀際の庭には、黄金色に輝く銀杏の巨樹が天を刺す。

寡黙になったメンバーは、三々五々に白い玉砂利を踏みしめ、真っ青な空を見上げて大きく深呼吸したり、本堂脇の立札に歩み寄って墨書された案内書きを読んだりするが、いずれの表情共、何とも穏やかな仏顔。

寺を後にして、陽柔らかな里道をぶらぶら歩き。

途中、道端の無人売店で、4ヶ200円の冬至湯用の大玉ユズを購入したり、畑地の産物を論評したりと、またはしゃぐ。

起伏なだらかな丘陵を更に歩くと、右手の小丘に、実を満々と付け、まさに、枝撓み、“鈴なり”状態の柿の大樹が、抜けるような青空に枝羽を上げる。

写真か絵画を見る鮮烈さで、入手の工夫も忘れ、しばし見入る。

【余談38】知識の無さもあるが、山歩きで得られる“自然の恵み”は少なく、果実とな

ると皆無に近い。

常日頃から、「柿」の一つ位は嚙りたいと思っているが、良く知られる、「山葡萄」、「山無花果」の区別も付かず、登山道に落ちた、小振りの「イガ付き栗」を拾うのが精一杯である。

最近では、もっぱら、「山の水」で、毎回、1.5ℓのポリタンと予備水筒を満タンにして持ち帰り、家では生水で飲料している。(コーヒー用には、自宅近くの湧水を利用)

ぶらぶら歩きは、なお続く。次なる向かい先は、案内板が導びく、「幻の滝」。

道の先に、人で賑わう屋台の並びを発見！

狭い通路を挟み、裸木を組上げただけの簡易な売店と休憩茶屋が並び、左右を覗き見しながら、人の流れに従い進むと、なんと正面眼下崖下に、「幻の五滝」が姿を現す。

木梯子を伝って、早速、急坂を下り、順路通りに五滝を周遊。

一巡後、木が朽ちて、今にも床が抜けそうな、崖下の休憩台で一服。

滝を背景に、全員の写真を撮ろうとするが、最新式のデジカメ操作は、持ち主含め、戸惑うばかり。

道に戻り、右手に五滝への流れを見ながら、なお歩く。

丘陵を少し下ると、間無く、右手の流れが左に大きくカーブし、流れを渡る小さなコンクリート造の堰に出会い、そこが、「養老溪谷／滝めぐり遊歩道」の下流入り口と知り、「幻の五滝」の水源が、「養老川」と知る。

遊歩道は、道幅約1mのコンクリート造で、全長1.7Km、片道約45分のフラット道。

道の右側は、枯れ木が目立つ雑木・草林で、左手は水量豊かな「養老川」、更にその奥には、広葉樹が根を張る丘陵崖。

なかなかの景観と喜び、地を這う急流に、丹沢山麓の「出会いの流れ」を思い浮かべていると、**擦れ違い人(女)が、“「奥入瀬溪流」の様ね”と、仲間同志の会話を交わし、上から下まで燃えるような紅葉に、“現在が盛り”と云おうとすると、常連らしき人(男)が、“来週末辺りがピークかな”と、連れに声を掛けて水を差す。**

往く人来る人と、人の流れに絶え間なく、抜きつ抜かれつ、はたまた右に左にと道を譲って、錦秋の溪谷歩きを楽しむ。

人のざわめき声が近くなると、間もなく、遊歩道の終着地らしき、広い河原に到着。

人の数は、予想外に多く、河原の大石に腰掛け、それぞれに休み、お喋りしたり、弁当広げたりと思いつきにくつろぐ。

しかし、視線のみは一方向、眼前の溪流に流れ落ちる「栗・の滝」に集中し、まるで、野外劇場に居るが風の妙なる感覚。

「栗・の滝」は、千葉県随一の名瀑と評され、滝長100m、幅50m、延べ落差30mの堂々たる流れ。紅葉トンネルから流れ落ちる様が、見事にアレンジされる。

【余談39】千葉県には、何故か高い山が無く、最高峰は408mの「愛宕山（南房総）」となり、都道府県の山高自慢では最下位となる。（次は沖縄県で、「於茂登山（石垣島）526m」）

なのに、何故こんなに水豊かかと不思議がるとメンバーが笑う。

後日、本で調べると、千葉県は高原が多い地域で、養老溪谷の豊水は、保水力に恵まれた土質の所為と知り、水源は麻綿原（まめんばら）高原と知る。

昼食は、急坂上って、「滝見苑」。

旅の情報誌では、常連広告の温泉旅館で、立地を生かして、食事と日帰りの入浴サービスも併営するしっかり者。

入り口付近は待客で溢れ、店のルールに従い、グループの代表者名と人数を記帳し、順番を待つ。

1時間も待ったか、やっと案内された席は、スペースたっぷり、隣席とも独立した嬉しいレイアウト。

入り口部との対照に、温泉旅館ユースの宿命かともほくそ笑み、掛け声高くビールを注文、何か当てをとメニューを広げて、眼が点に！

なじかは知らねど阿吽の呼吸、メンバーのオーダーは、居並ぶ品書き掻き分けて、「カレー・ライス」と「山菜蕎麦」、各2ヶに集約される。

スケジュールの遅れから、「梅ヶ瀬溪谷」巡りを断念し、「養老溪谷駅」への移動を決定。次発バスには時間があると、再度、「栗・の滝」、上流部岩場に降りて湯を沸かす。

大岩が形成する川床は大半が露出、幾筋もの、透明色の水流が、岩溝を縫うように走り落ち、途中で、合流したり、岩を打って飛散したりし、最終、釜淵へと怒濤に落ちる。

滝流、上流部からの眺めは、周囲を包む広葉樹が、しっとりとした、落ち着いたある綾取りを見せ、白い激流と見事に調和。

なかなかの風情と喜び、滝壺の向こう側から、こちらを見上げる人の群に、“邪魔者達め”、と苦情を吐く。

満員御礼の「養老溪谷駅行き」バスに乗り込み、しっかりと座席を確保。

車中から見下ろす溪谷は、まさに童謡唱歌、「紅葉」の世界で、歌詞そのままの“色模様”に思わずハミング。

駅に着くと、ちょうど、上りの電車が到着したばかり。

悲しい性と云う無かれ、駆け出す人につられて慌てて飛び乗り、満員電車で居場所を探す。

五井駅に戻り、内房線に乗り換え、海沿いに南総／里見へ下る。

早、暮れなずむ車窓から、大きな夕陽を追い、“もう30分早ければ、今日の宿泊地、岩井の浜から夕陽が…”、と口惜しがる。

すっかり日の暮れたJR岩井駅からは、ワゴン車の出迎えを受け、今日の宿、民宿、「魚赤」へ。

意外なるか、宿は街の広い通りに面し、増築を重ねてか、そこそこの部屋数規模、迎える声も威勢良し。

また宿の周辺には海の臭いならず、赤いネオンが怪しく光る。

部屋に案内されるや、またまた、トラブル発生！

山田氏が、“あれ、お姉さん、部屋を間違えているでしょう！”、“ほら、すでに別の人の荷物が…。私達の部屋じゃないでしょう”、とお女中叱ると、“連れの人が…、先に…”、と戸惑い声で言い訳する。

迎合するメンバーの怒号が宿中に響き出すと、お女中堪らず帳場に走り、混乱！、混乱！、大混乱！！

大の男4人が部屋の入り口に立ち塞がり、早く落ち着かせろと与太を打つ。

その時である、肩に白タオルを掛け、浴衣に羽織姿の男衆一人、暗い廊下の向こうから登場し、“えらく遅かったじゃないか！”と一声発す。

何と！、何と！、吃驚仰天、現われし姿は、昨日退院したばかりの吉川氏！

<訂正> メンバー：米本、山田、吉川、小林、磯崎

宴の料理は、「地元の幸」ふんだんで、期待通り、「刺身の舟盛り」も加わる豪華版。

侍るお女中から、料理自慢の一つも聞きたいところであるが、宴の話題が、もっぱら、

吉川氏の「計略話」に終始するは止む無しか。

話題に入れぬお女中気遣い、「地引き網漁」の参加や見学の可否を訊ねると、“時期は終わりました”、と話の穂を折られる。

部屋に戻って、二次会開始。

“人脈”を話題に、いつものように喧々囂々、丁々発止。議論の合間を縫い、近くのコンビニへ酒の調達に走る“若気”に、ついほくそ笑む。

翌朝、再度、岩井駅迄送ってもらい、洒落た駅舎を背景に、全員揃って写真撮影。

【余談40】 デジタル・カメラの普及スピードは凄まじいばかりであるが、早、飽和状態に達し、携帯電話同様、買い換え需要の時代に入ったと云われている。

次代のフィルムと期待されたAPSフィルムは、性能面から、35mmフィルムに退けられ、手軽で高性能と人気を博したコンパクト・カメラも、デジカメの登場により、完全に息の根を止められて全滅。

デジカメの対抗軸になると予想された一眼レフ・カメラも、プロの世界を例外に、近時、デジタル化が進み、35mmフィルムが店頭から消失してしまうのは、そう遠い日では無い。

(アナログカメラ所有者は対策要。無責任予想では、プロ用フィルムのように、高額化は避けられないが、一応残されるのでは)

こうした動きは、カメラメーカーを含めた写真業界の再編を意味し、ここ数年で業界地図が一変され、街の写真、D・P・E店数の大幅な減少は必至と思われる。

近隣、D・P・E店の親父は、未だデジカメ技術を認めず、“写真は撮りたい対象をいかに画像表現するかで、忠実に、何でも再生すれば良いというものではない”とアナログ写真の画像処理技術(自分)の必要性、優位性を主張し、近所には、未だ、唯々諾々と従う旦那もいる。

内房線を二駅上り、本日の訪問先、「鋸山」への最寄り駅、「浜金谷」へ移動。吉川氏は、大事を取ると云う言い訳で、そのまま木更津へ向かい、「海ほたる」経由で帰宅の途に。

秋日和下、駅前に人は少なく、柔らかな朝の陽を受け、「鋸山」への裏登山道を歩くと、途中、神奈川/久里浜港からフェリーで金谷港に渡って来たハイカー数組とも合流。

舗装路脇の木板ガイドに従い、樹林に覆われた登山道に入ると、急登の連続で、土の感触を楽しむ間も無し。それでも、最初の目的地、「観月台」迄を一ピッチで登り切り、**一気に昨夜の酒気を抜く。**

「鋸」の一峰となる「観月台」からは、東京湾の展望が一举に開け、「富士」こそ姿を見せないものの、見事に晴れ上がった湾向こうに神奈川／三浦半島を遠望する。

屋根付きの休憩所で、しばし休み、汗を乾かし雉を撃つ。

【余談41】山言葉に、“雉を撃つ”と云う隠語がある。

尾籠な話で恐縮だが、藪に入り用を足すことで、その様が雉撃ちのスタイルに似ているからと云うのが有力説である。

現在、山での糞尿処理が大きな問題になっているのは周知の通りで、「富士山」が世界自然遺産登録を見送られた、大きな理由の一つとも云われる。

他の山用語に、“沈する”と云う言葉がある。終日移動せず、のんびり過ごすことで、長期のトレッキング時、体を休めたり、日程調整日として組み入れられる嬉しい1日である。

山頂へと高度を上げるに連れ、岩場の道が多くなり、山斜面には切り刻まれた岩肌が露出し、岩山の様相を色濃く見せ始め、かつて、江戸城々壁用にも切り出されたと云うガイド文を思い出す。

それにしても、余りに急登が続くため、彩色を見つけては、写真撮影を口実に呼吸を整え、パーティ列は間延びするばかり。

興醒めは、山頂近くに設けられた入山ゲート。乾坤山、「日本寺」の拝観料と称し、入園料600円を請求する。

何とも理不尽、法外と顔をしかめるが、ここまで来てはどうなるものでなく、周りに抜け道探すも、岩壁に刻まれた「百尺観音」が見てござる。

途中、浜金谷からケーブル・カーで上ってきた人々と合流し、最後の急坂を登り切ると、公園の様な山頂展望台に到着。

早速、ガイド・ブックで定番案内される名所、「地獄のぞき」に上り、記念写真の一枚もと、グラビア通りにポーズを取ると、撮ってもらえるどころか、一部メンバーは、そ知らぬ顔して近寄らず。

理由は簡単、名所地は、崖上の宙にせり出した大岩上に、粗雑な柵で周囲を囲っただけの危うい代物、君子は危うきに近寄らずと云う。

山頂は360度のパノラマ視界。

南の方向、館山／太平洋方面の展望が開け、昨日の宿／岩井を指さしたり、今日の食事処／保田を探したりと大はしゃぎし、広場に陣取り、お疲れ様と、お湯を沸かして、コーヒー、紅茶で一休み。

やがて、ガイド嬢に引率された団体客が到着し、狭い山頂大賑わい。

登山自動車道（有料）もあったかと舌打ちし、観光客の中に、ハイヒール履きでスカート姿の女性を見ては、最早退散する以外は無しと観念し、火器をしまってリュックを担ぐ。

表参道は石畳と石段の急坂続き。

道脇には、「西国観音」、「百躰観音」と、至る所に仏様が居並び、余りの多さに、少し欲張り過ぎではと罰当たりを云う。

パンフで現在位置を確認しながら、網の目の様に張り巡らされた迷路を下り、千五百羅漢道から大仏前参道を歩くと、「大仏広場」。

総高31.05mの「鋸山日本寺薬師瑠璃光如来」が鎮座し、「奈良東大寺廬遮那仏」／18.18m、「鎌倉高德院阿弥陀如来」／13.35mを凌ぐ大々仏と大自慢。

トイレに行ったり、身を整えたりと、しばし休憩後、腹が空いたと荷を担ぎ、過ぎるほどに整備された表参道石段をドタッ！、バタッ！（もはや、“トコトコ”のリズム感は無し）と下り、仁王門で、「鋸山」とお別れする。

内房線々路沿いを、JR保田駅に向かい、南に歩く。

鉄路と歩道の間には黒土の畑が造作され、野菜に混じり、色んな花々も植栽。さすが、「花街道」と感心し、泥土の付いた花名札を手繰っては読み上げる。

とは云うものの、歩けど歩けど町並み遠く、鉄路の先に、駅舎らしき建物はとんと見えず、重いザックが肩に食い込み、脚は正に棒となる。

いつまで続くか、この行軍、せめて、土の道を歩きたや！

やっと駅に辿り着くと、お目当ての料理店／保田漁協直営の「ばんや」は更に先との非情な案内書き。バス利用には中途半端と、自棄のやんぱち、またまた歩く。

町の通りを抜け、海沿いの道を歩く頃には、会話どころか、いつの間にか隊列が崩れ、先頭としんがり間に大差が付き、**整えようにも、先陣は知らん振りで、後ろの御仁は大将気取りで悠々歩き。**

互いに慌てる風、いささかも無く、取り付くしまは一切無し。

「ばんや」は保田漁港並びのレストランで、大漁旗をはためかせて大歓迎。

ウエスタン・スタイルを意識したか、牧場風に周囲を木柵で囲い、前広場の片隅には魚の青空市場を併営する。

“やれやれ”とばかりに、木ベンチに腰掛け一息付くと、入口付近は、「滝見苑」にも劣らぬ盛況振り。

悪い予感があったか、幹事が走り、戻って来ると、“確か、来る途中にも料理屋が1軒あった筈”と慰める。

道に戻り、広い通りに面す魚料理店、「Y屋」の暖簾をくぐる。

威勢良い掛け声で迎えてくれる店内は、どこにでも見られる大衆和風料理店風で、すでに数組の先客が飲食中。

靴を脱ぐのが面倒と、奥の座敷を敬遠し、調理場に近い、土間の木テーブルを選び、“お疲れ様”と冷たいビールで乾杯交わし、喉を潤す。

笑顔が可愛い娘さん、伝票片手にテーブル脇に立ち、メンバー全員に順の視線を送って注文伺い。

喜び勇んで、さあさあ、どれどれと、「品書き」拝見すると、「刺身定食」、「天ぷら定食」、いずれ見事な達筆書きで、続く数字も“2”から始まる重厚さ！

メンバーは、急に口をもごもご、視線は宙を彷徨い、辺りを見回し、何故か、「グラス」を机に戻す。

沈黙を破り、妙手放つは米本氏。

土間に立て掛けられた黒板を指さし、“金目鯛の煮付け（¥700）に、ご飯とみそ汁”と一品拾う高度技。

何とも不思議で、どうにも不思議、メンバー全員の注文は偶然一致し、可愛い娘さんが大声で注文を復唱する。

会話を戻し、冷たいビールで緊張をほぐし、“その手には乗らず”と、手間暇掛かる調理の合間にも、ビール追加は一切無し。

やっと登場の「金目鯛定食」は、煮汁たっぷり、肉の盛り上がりが見事な大振りで、ご飯、みそ汁、漬け物が付き、旨い、旨いと舌鼓み。

骨以外は一切残さずの満足表示で店主を喜ばし、お茶で仕上げ、にこにこ勘定、楊枝をくわえて、“ご馳走様”と店を出る。

JR保田駅に戻り、今回の旅も無事終了。

帰路は、米本、山田の両氏は、隣駅浜金谷からフェリー利用で、久里浜へ、小林氏は、JRを乗り継ぎ船橋へ、残る御仁は、木更津から、「海ほたる」経由で川崎へと算段し、待ち時間を利用し、全員で駅前スーパーを覗く。

【余談42】 旅先での楽しみとし、地元スーパーマーケットへの立ち寄りをお薦めする。

土産物の購入は、空港・駅前、朝市等、その地の名産品を取り揃えてくれる物産店を利

用することが多いと思うが、周知の通り、広宣費、場所代、扱い量等、種々の要因から、販価は、かなり割高となっている。

しかし、当然のことながら、そこには人々の日常生活があり、その一方に、彼等の暮らしを支える、極一般的な市場も並立されている。

地元スーパー・マーケットは後者市場の典型で、民芸品等を求めることはできないが、食品に関しては、新鮮、廉価な地元産品を手に入れることができる。

立ち寄りブースは、自ずと、魚、野菜、惣菜売場となり、内陸山国では、魚介類の品揃えは少なく、加工物が多くなるが、ヤマメ等溪谷の幸や、ラップ無しの、葉艶の良い野菜も見られ、奥多摩の駅前ミニ・スーパーでもその傾向を感じる。

一方、北国では、豊富で活きのいい寒流魚の隅に、見慣れた暖流魚が寝転び、南国では山の幸・海の幸共に、何故かグロテスクな商品物が目立つ。

惣菜売場も楽しい。全国の正月料理（おせち料理）を知りたいなら、是非、年末に一見、デパート、紹介本とは違った世界が見られる。

今回の買い物は、「富津のアジの開き」、トホホ…。

駅に戻り、昨夜の残り酒を引っ張り出して、木ベンチで小宴開始。

飲酒が不満を解放させたか、怒りが沸々、“さっきの定食代金（額は失念）は何だ、法外ばかりか、何とも理不尽、価格建てに合点がいかぬ！”と口火が切られると、別の方から、“あの煮付けは、素人も素人、ど素人、表面をてからす程度に煮るのがコツで、露が多ければ良いと云うものでない！”と怒号が続き、周囲に乗客が集まっているのも忘れ、得たりとメンバー、首を振り振り、相槌打っての憂さ晴らし。

なお明るい晩秋南房総の夕、全員同じ電車に乗り込み、帰路に着く。